

「テスト設計・言語発達一般」に関する質問

Q 1. なぜ「対話型」で測定するのですか。ペーパーテストではだめですか。

A 従来型のペーパーテストでは、文化的、言語的に多様な背景を持つ子どもの力は、なかなか測れません。また、紙筆テストでは潜在的な力を測るには十分ではありません。ただ現場では、日頃の指導を通して、子どもがどのくらい理解しているのかを知る必要があります。潜在的な能力は、対話を通して引き出すのが一番です。対話によって、子ども自身が学びつつある自分に気づき、それが自信にもつながります。また、学習に対する興味や意欲をかき立てるには、指導者との関係作りが必要ですし、指導者の励ましや助言が必要です。そのためにも、対話を重視しています。

Q 2. 外国人児童生徒の日本語力と日本人児童生徒の日本語力はどこが違うのでしょうか。どのくらいで、またどうすれば日本人児童生徒に追いつくのでしょうか。

A JSL 児の日本語力は、何歳で日本に来たか（入国年齢）、何年くらい日本にいるか（滞日年数）、母語（あるいは第一言語）がどのくらい伸びているかによって異なります。日本語の習得が速いのは、母語がしっかりしていて、母語で教科学習の経験がある子どもです。それでも話すかに約2年、読み書きに5年かかると言われます。逆に日本生まれや幼児期に来日した子どもは、日本語力に問題がないと思われがちですが、実は問題があり、日常会話は流暢でも、読解力や作文力の獲得に5年から10年かかると言われます。母語の下支えがある場合は5年、ない場合は10年かかるといことです。また、追いつくと言っても日本人児童と全く同じ力を持つわけではないので、義務教育が終わってからも何らかの支援が必要です。

Q 3. 滞日年数が4大要因の1つということですが、滞日年数とJSL 参照枠のステージとはどんな関係があるのでしょうか。

A 各ステージにほぼ1年かかるといったらいいでしょう。つまり授業参加ができるのは、ステージ5ですが、ステージ5に達するのに5年くらいかかるといことです。ただ、日本語学習の開始年齢が高ければ高いほど、母語力の下支えがあるため、ステージ1から3の習得が速くなります。逆に日本生まれや幼児期に来日した子は、話す力はステージ4でも、読みと書きの習得に非常に時間がかかるといった方がいいでしょう。

Q 4. 入国年齢は、日本語の習得とどのような関係がありますか。

A 入国年齢が高い子どもの方が、母語の力が強い上に学校経験も豊かですから、教科学習に必要な言語能力の獲得が速いのです。しかし、入国年齢と直接強い関係があるのは、母語の保持と伸長です。年齢相応の母語力を持って来日した場合は、日本語を習得しつつ母語も保持することが可能ですが、母語が未熟なまま、日本語環境に置かれた低学年児童の場合は、日本語力と母語力が競い合うことになり、母語があっという間に弱まっていきます。そうになると、家で親が母語で話しかけても日本語で応答するという、シグザグのコミュニケーションスタイルになり、親子関係に大きな亀裂を生じます。つまり、じっくり話し合う共通の

言葉がなくなってしまうのです。ですから、日本生まれや、幼児期に来日した子どもには、保護者に家庭で母語を率先して使うように勧めると同時に、学校全体で「日本語も大事、母語も大事」というメッセージを子どもに伝え、「母語も出来る子」という誇りやアイデンティティが早くから育つようにする必要があります。

Q 5. 支援の段階を知るために、「JSL 評価参照枠〈全体〉」(8 頁)を参照したり、「DLA 採点表〈全体評価〉」(140 頁)に記入したりすることになっていますが、全ての DLA を一度にしなければならないのですか。

A いいえ。子どもの日本語力は会話力を基礎にして段階的に伸びていくと言われています。まずは、会話力がしっかりと身についたかどうか測定してください。その上で、聴く力を DLA〈聴く〉の DVD の A (初歩レベル) を使って、まとまりのある話が聴けるかどうか測定します。また、文字の読み書き能力が一定程度進んだ段階になって、DLA〈読む〉を実施してください。そして、DLA〈書く〉でまとまりのある文章が書けるかどうかを測定してください。教科内容がどの程度わかるかを測定したい時に、DLA〈聴く〉の B (教科内容レベル) を聴かせて、日本語力を測定します。このように、子どもの日本語能力の伸びに合わせて段階的に実施することが大切です。一度に全ての DLA を実施して、日本語能力を測定するようなことはしないでください。

Q 6. 「母語で語彙力チェック」は、どうして必要なのですか。

A 理由が3つあります。第1は、母語の語彙力を調べることで、日本語力全体の伸びをある程度予測できることです。母語の語彙が豊富な子は、日本語の語彙の習得も早いのです。また語彙の力は話す力、読む力、書く力と密接な関係があるため、母語力全体の予測もある程度できるのです。第2は、言語習得が遅い場合、言語の力が弱いだけなのか、何らかの機能的障害や学習障害があるためか、見分けがつかません。見分ける方法の一つは、両言語で同じテストをして、共通の問題があるかどうかを調べることです。障害がある場合は、同じような課題が日本語にも母語にも現れます。第3は、母語と日本語の力関係を見ることによって、ダブルリミテッド(母語でも日本語力でも年齢相応レベルに達しない学習困難児)の早期発見に繋がります。

Q 7. 日本生まれの子どもで、日本語を流暢に話すのですが、どうして授業についていけないのでしょうか。

A 日本生まれの JSL 児は、日常会話の力は育っても、教科授業に必要な語彙や読み書きの力が母語話者児童と同じようには育ちません。例えば日本語母語話者児童は、5,000 語近い語彙を持って小学校に上がってくるのですが、JSL 児は 100 語もないケースが多いのです。そういう場合、ひらがなやカタカナなど文字は覚えても、文を読むのに必要な語彙が足りないために意味がつかめません。また、授業や教科書で使われる語彙が、毎日使う日常語彙と違うことも、授業についていけない原因の一つです。このため、教科書用語などは、ていねいに教える必要があります。

Q 8. JSL 評価参照枠〈全体〉や個人指導記録は、学校運営や教育委員会に、どのように役立つのでしょうか。

A JSL 評価参照枠〈全体〉で、在籍の JSL 児童生徒がそれぞれの技能でどのレベルの支援を必要としているかが分かります。その情報が、学校運営や教育委員会に役に立ちます。学校全体、あるいは地

域全体で、どのレベルの支援がどのぐらい必要かという情報を踏まえて、教員の配属や予算の計上につなげることができるといえるでしょう。また「個人指導記録」に、評価の結果を記録していくことにより、指導教員の入れ替わりや転校の際に、指導の継続性を確保することが可能になります。

Q 9. 保護者も子どもの日本語習得について知りたがっています。保護者にはどのように伝えればよいのでしょうか。

A 母語語彙チェックの結果も含めて、四つの言語領域の習得状況を、そのまま保護者に知らせてあげるといいでしょう。技能別DLA評価やJSL評価参照枠<全体>は、担当教師や指導員が学習目標と子どもの習得状況について、具体的に説明するのに役立ちます。DLA<話す>やDLA<読む>の録画や、DLA<書く>で書いた作文なども、保護者に見せて、実際にどのぐらい日本語力が伸びているかを自分の目で確認してもらいたいでしょう。長い目で見て、子どもの母語と日本語力の両方を強めることが子どもの言語能力全体、また学力に大きなプラスになりますので、家では、保護者が母語を意図的に使用して母語力を強めることを勧めてください。母語を伸ばすことが、ゆくゆくは日本語力を強めることにもつながるのだ、という点を強調するといいでしょう。

<はじめの一步>に関する質問

Q 10. <はじめの一步>を終えるだけで1人20分~30分かかってしまいました。早見せで次へ行ってもいいのでしょうか。それともしっかり答えを待つのでしょうか。

A <はじめの一步>は口慣らし、ウォームアップです。余り時間をかけないで、テンポよくさらっと済ませるように心がけてください。

Q 11. いつも勉強を教えている児童生徒の場合は、<導入会話>の自己紹介はなくてもいいのでしょうか。

A はい、省略しても構いません。柔軟に対応してください。また自己紹介だけでなく、既にわかっている内容は省略していいのです。ただし、「今日は知らない人になっていろいろ質問するから、教えてくださいね」という指示を出して、<導入会話>を全部やってもらうという選択もあります。

Q 12. 語彙チェックで、普段使われないような語彙も含まれていました。どうしてこの55問を選んだのでしょうか。

A 13の領域から複数の語彙を選んでいきます。領域とは、例えば、体の部分、食べ物、動植物、機器、家の一部、職業、乗り物、学校生活の動作、仕事の動作、感情、形状などです。その中で、全体の名称とその一部(局部)の名称を対比して入れてあります。例えば、手と指、机と引き出し、木と枝などです。習得論の立場から、全体名称の方を先に習得する、そして忘れるときは局部名称を先に喪失する、という仮説に基づいて作成してあるものです。さらに品詞では、名詞、動詞、形容詞が入れてあります。

「DLA〈話す〉」の実施に関する質問

Q 13. 少し説明すると思い出すことが多かったのですが、数秒待って答えが出なければ「できない」としたほうがよかったですでしょうか。

A まずじっくり待ってあげることが大事です。それでも答えがでなければ「できない」と判断したらどうでしょうか。多種多様なタスクを数多く与えることによって、総合的にどのぐらい話す力があるかを判断するので、1つの問題にあまり時間をかけずにつぎのタスクに移ったほうがいいでしょう。

Q 14. 標準語ではなく、地域語で話した子どもの話す力の評価はどうなりますか。

A 話す力の評価は、地域語あるいは標準語という基準で区別して評価されるものではありません。ただほかの地域からの編入生で、母語の影響なのか、その地域語の影響なのか分からないこともあります。その場合は、詳しい事情はあとで調べることにして、その場ではすべてを肯定的に受け止めることが大事です。

Q 15. 日本語で聞いているのに、母語で答えた場合は、どうすればいいですか。

A まずは、「日本語で言ってみてください」とやさしく促してください。ただ、来日したばかりで、日本語体験が浅い子どもには、「母語で答える」というサバイバル方略を取る子どももいます。そのような場合でも、まず「日本語ではなしてください」と促してください。それでも母語で通そうとしたら、「DLA〈話す〉」の評価はまだ無理だということで、そこでDLAを終了してください。

Q 16. 実施者の日本語が理解できないのか、それは分かっているが、応答ができないのか分からないときは、どうすればいいですか。

A 一度の説明や質問が理解できない場合もあります。3回までは繰り返し同じ言い方で話しかけてください。それでもわからない場合は、つぎのタスクに移ってください。ただ3回繰り返しても応答がなかったということは、日本語力の判定に役立ちますから、記録に残しておいてください。

「DLA〈読む〉」の実施に関する質問

Q 17. ある程度理解していても表現力が乏しい場合、うまく自分の言葉で説明できていなければ、やはり「読む力」がない、ということになるのでしょうか。

A 表現力のテストではないので、あくまで内容が理解できているかどうかで判断します。つまり、評価者が子どもが表現したことを通して、読みの理解度を推察するということです。ただ母語の話す力の

ほうが明らかに強く、また子どもがそう望む場合は、「DLA〈読む〉」を終了した段階で、母語で話すように促してもかまいません。後で、母語がわかる人に録音データを聞いてもらおうとよいでしょう。

Q 18. 物語の再生で、すらすら答えるのですが、読んだ内容ではなく、自分の想像で答えている場合があります。そのようなときには、どのように対処しますか。

A 子どもが話している最中は否定せず、最後まで聞き、受け止めます。評価をする際は、自分の想像で答えた部分がテキストの内容と違っていれば、その内容を十分に理解していなかったと判断します。指導においては、予測・推測力は読解において大切な力ですので、その力を認めつつ、細部の内容にもよく注意を向けるように指導するとよいでしょう。子どもは、読んだ内容ではなく、テキストのイラストなどから自分なりに内容を想像してしまうことがよくあり、特にそれが習慣になっている子どもにはいけない指導が必要です。

Q 19. 読むことに興味はあるようですが、漢字がネックになってすらすら読めない子どもには、どうしますか。

A 「漢字がわからなければその場で教える」ということを、まず、しっかり子どもに伝えます。それでも選択したテキストが読み進められない場合は、テキストのレベルを下げます。

Q 20. すらすら読めるのですが、内容を全くと言っていいほど理解していない場合があります。そのような場合は、どのように対処したらいいでしょうか。

A 確かにすらすら読んでいても、文字を追っているだけで、内容についてはほとんど答えられない子どもがいます。「字面読み」とでも言えるような、この読み方は、実は1970年代から先住民や移住者の子どもの課題とされてきました。幼児期の言語環境が貧しいことと関係があります。例えば、絵本の読み聞かせをしてもらった幼児は、文字の背後に面白いストーリーがあることを知っていますが、そのような経験がなかった子どもは、1年生になって文字を習って本を読むようになると、テキストのはじめの文字から最後の文字まで読むことが、「読む」ことだと認識するようです。では、このような子どもにどう対処するかということですが、短期間でも幼児期に戻って、「絵本をいっしょに読んで、その内容について話し合う」という活動を取り入れるといいでしょう。

「DLA〈書く〉」の実施に関する質問

Q 21. 質問を多くすれば、児童生徒がもっと書けるようになって感じたのですが、指導的な助言や質問をしてもいいのでしょうか。

A こうしたら書けそうという質問・声かけはどしどししてあげてください。その際は、助言を「与える」のではなく、「引き出す」ための質問をたくさんしてください。質問されたことについては答えてかまいません。子どもが自分で考える前に先回りしないようにだけ、留意してください。

Q 22. 児童生徒が文章を書くときに、どこまで文章が成り立つように支援すればいいのでしょうか。

A 支援は求められた時に与えるようにしてください。自力でどこまで書けるのかを見るのが、アセスメントの一つの目的です。支援者に全面的に頼ってしまう状況は避けるように心がけてください。

Q 23. 文章を書くときに児童生徒が書けなかったので、話しながら一緒に文章を作り、それを写すことでとりあえずは書いたのですが、このような方法でいいのでしょうか。

A やり方としては可能ですが、「一緒に文章を作る」際に、支援者が先回りして文を言ってしまうと、子どもの作文力が測れません。子どもにまず話させ、それを文字にするようにしてください。支援者の役割は、子どもから発話を引き出すことです。

Q 24. 簡単に書いて済ませる子や書く内容をよく考えてから取り掛かる子など、様々な子がいます。与えられたテーマの作文で本当の日本語力が測れるのでしょうか。

A もちろん、一つのテーマの作文だけで日本語力の全ての面を測ることはできません。子どもの様々な面を総合的に見て初めて日本語力の総体がわかります。DLA では、出来上がった作文だけでなく、作文に取り組む姿勢(書く態度)も作文力の一部として評価し、また、対話によって潜在的な力を測ります。簡単に書いて済ませる子に対しては、書いたあとの対話の中で、よりよい取り組み方へのヒントを自覚できることが望ましく、それが作文指導へのヒントとなるでしょう。

Q 25. 用紙を選ばせるとありますが、ほかの用紙を使わせてもいいのでしょうか。

A はい、用紙は何を使ってもかまいません。巻末資料 4. に用意したのは、まず書くことへの意欲を高めること、そして原稿用紙が使えない低学年の子どもに、年齢に適した升目の用紙を提供するためです。

「DLA〈聴く〉」に関する質問

Q 26. DVD を見せるときに、A を見せて内容が理解できていたら B の DVD も見せていいのでしょうか。それとも、片方の DVD しか見せないのでしょうか。

A 児童生徒の聴く力をより適正に測るために、基本的には、A、B の 2 種類の DVD を聴かせることをお勧めします。しかし、ふだんの観察から A が不要と判断されたら、B から始めてもかまいません。B の聴解用 DVD を使用する場合は、まず、年齢より一段、または二段下の DVD を聴かせた方がよいでしょう。それらが理解できるようであれば、段階を上げて聴かせてみましょう。(実践編・第6章「DLA〈聴く〉概要」p105 参照)。

Q 27. 1回のテストで児童生徒の聴く力が測れるのでしょうか。DVD の話題により聴き取れること、聴き取れないこともあるのではないのでしょうか。

A 実際には、短い聴解用 DVD を 1 本聴かせて児童生徒の聴く力のすべてを測ることは難しいことです。児童生徒の聴解力、授業の参加の可能性を見るためには、聴解用 DVD を一つのモデルとしていただき、教室での実際の授業でも同じような観察をしていただくことをお勧めします。本測定の診断結果は参考としてお使いください。

Q 28. 対話型で聴く力が測れるのでしょうか。話す能力の測定にならないのでしょうか。

A 「DLA〈聴く〉」では、児童生徒に聴解用 DVD を見せ、その後でどんな話だったか内容を言わせたり、それについて感想や意見を言わせたりして、児童生徒がどの程度内容を理解したか測定します。話す力のチェックでも、暗記チェックではないので、話の大筋が言えれば良しとします。実際児童生徒の話す力にはばらつきがあり、答える時も文にはならず単語で答える等レベルは様々です。実践ガイドには、あらかじめ話の大筋をまとめたチェックリストが載せてあります。重要と思われる語や表現には下線が引いてあります。文で答えられない場合も、それらの重要な語が言えれば理解できていると考えます。

Q 29. 一度で聴き取れず、もう一度聴きたいと子どもが言ったら、2度見せてもいいのでしょうか。

A 原則的には、聴解用 DVD は 1 回のみ見せます。実施に当たっては、突発的なことが起こることも考えられます。また、高学年でメモ取りに夢中になり聴くことに問題が生じた場合などは、教師の判断で再度聴かせてください。そういうケース以外は、もう一度みたいと言っても、1 度しか見せません。ただし、1 回視聴した後に、内容に興味を持ち、もう一度聴きたいというのは、「聴解行動」の評価対象となり、高く評価できます（実践編・第 6 章「DLA」〈聴く〉「1. 〈聴く〉概要」p105 参照）

Q 30. 未習語彙が多いせいか、ほとんど理解できなかったようです。そのような場合はどうしたらいいのでしょうか。

A 「DLA〈聴く〉」では、まず、聴解用 DVD を視聴する前に、視聴覚補助教材を使ってテーマ、キーワードを確認します。そのうえで、どのくらい理解できるか判定します。聴解用 DVD の視聴後に、言葉の意味を質問されたら児童生徒がわかるように説明してください。B（教科のテーマに関わる内容の聴解用 DVD）を聴いて、内容がほとんど理解できていないようであれば、年齢より一段、または二段下の DVD を聴かせてください。それでも、理解が難しい場合は、A（初歩レベル）の DVD を聴かせてみてください。